

がんの新しい診断と治療確立を加速

北大寄付講座「探索病理学」

5年間設置延長

北大医学研究科の寄付講座「探索病理学講座」は、二十四年度から設置が五年間延長される。専任教員を増やし、がんの新しい診断と治療法の開発を目指した橋渡し研究をさらに進めていく。

同講座は社会医療法人北斗(帯広市)と企業二社の寄付を受けて二十年十月開講し、教授は分子細胞病理学分野の田中信哉教授が兼務し、西原広史特任准教授が専任で運営。三月末で設置期間が終了するところだったが、研究実績が評価され、寄付者のさらなる支援で継続が決まった。

研究テーマの一つが脳腫瘍の診断と治療。組織特異性が高く病理診断が難しい中、全国有数の症例数となるグリオーマ百三十例、悪性髄膜腫六十例のデータを集積。グリオーマの血管パターンと予後の解析、テモゾロマイド抵抗性のメカニズム解析と病理診断法における治療抵抗性の判定法確

立に加え、悪性髄膜腫の生物学的特性の解明と新規治療法開発に向けた新知見を学会や論文で報告してきた。

腫瘍の病理診断は、癌取り扱い規約やWHO分類で標準化されているものの、同じ組織型や分化度の患者同士を比べると、浸潤や転移といった生物学的悪性度が大きく異なり、結果として抗がん剤治療などの成績にバラツキが生じるケースも少なくない。そこでシグナル伝達分子の発現パ

ターンに基づく新しい腫瘍のプロファイリング法を確立し、患者一人一人に最適な治療薬を選択できるように追究。これまでに

胃がん、大腸がん、膵がん、転移性脳腫瘍のプロファイリングを終え、同大腫瘍内科学分野とともに「既存の分子標的薬が、実は他のがんにも効くのではないか」(西原特任准教授)との視点で臨床研究を模索中だ。

診断の体制確立も推進し、海外の大学と連携を深め、共同研究も行う。四月から特任助教一人、いたいたい考えだ。

寄付研究部門「コンパニオン診断学」来月設置

北大病院

北大病院(福田諭院長・九百四十六床)は、寄付研究部門「コンパニオン診断学」を四月一日に設置する。

コンパニオン診断は、治療薬の有効性確保や副作用を回避するため、投与前に患者の特定遺伝子やタンパク質などのバイオマーカーを検査し、投与が最適な患者かどうか判定する診断法。がんに関連三社で設置期間二年

間。同大病院の寄付研究部門は「分子追跡放射線医療」と「地域健康社会」がある。

学術研究助成本道から2氏

大山健康財団

大山健康財団は二十三年度学術研究助成金贈呈者を発表。本道からは北大病原微生物学分野の五十棟理恵助教、旭医大寄生虫学講座の迫康仁講師が選ばれた。助成額は各百万円。五十棟、迫両氏の研究課題は次の通り。

チームケア不可欠

山崎院長(東京)が講演

札幌ホスピス緩和ケア

札幌ホスピス緩和ケアネットワークは特別講演会・シンポジウムを札幌市で開き、在宅ケアを専門に展開しているケアタウン小平クリニック(東京)の山崎章郎院長が講演。ホスピスケアの実践を通じ「ターミナル期

がん患者は医師、看護師だけで支えきれない」と話し、介護職員も含めたチームケアの重要性を指摘した。山崎院長は、同クリニックを中心に、高齢者貸住宅、訪問介護、訪問看護ステーション、デイ

在宅ホスピスケアの提供システムは発展途上と前置きしつつ、治療を拒んでいた乳がん患者が献身的なサポートで態度を和らげた事例を踏まえ「人は人との関係性の中で生きる時に喜びを感じ」と主張。医師や看護師にとどまらず、生活を

札幌大人事

(3月31日)◇退職▽名越智(整形外科学講座准教授)▽鈴木信寛(小児科学講座准教授)▽喜屋武玲子(同講座助教)(4月1日)▽医療薬学教授兼保健医療学部長看護学科基礎臨床医学講座兼助産学専攻科教授II宮本篤(医療薬学教授)▽集中治療医学兼麻酔科学専攻助教II吉田一太郎

健康向上、医療人育成へ

大